

診療所実習で学んだこと

あかりこどもクリニック 3年 IM

今回私はあかりこどもクリニックで実習させていただいた。本実習の目的は、地域の診療所を大学病院と比較することと、小児の疾患の鑑別診断はどのように行うかを学ぶこととした。

午前中は北原院長先生について診察の見学と聴診・触診の体験をさせていただいた。小児科を掲げていることから、乳児や小児の患者がほとんどを占めており、アデノウイルスや蕁麻疹、予防接種など様々な患者とその家族が来院していた。見学する中で、特に印象に残ったことがある。それは生後3ヶ月の患者の風邪用症状で来院した家族の症例である。子供の苦しそうな呼吸を心配している親御さんに対し、問診と聴診を行った結果、乳児で重症化しやすいRSウイルス感染の可能性は低いと判断して説明を行い、心配を取り除いていた。加えて、不安であれば検査を行う旨を丁寧に説明し、最後に「他に不安なことはありますか」とことばを投げかけ、親御さんが質問しやすい雰囲気作りを行っていた。また、診察室の机にはメモ帳が置かれ、蕁麻疹や咽頭の発赤の様子などについて、図を描いて患者とその家族に丁寧に説明している様子も印象的であった。院長先生の話に、「来院する患者の9割は治療をしなくても自然に治る。自分たちの役割は残りの1割の患者を見逃さないようにすることと、9割の患者を安心させること」というものがあつたが、このような丁寧な診察が患者や親御さんの安心に繋がっているのだと実感した。大学病院のような大きな病院では、原因が明確な疾患の治療や原因不明の重篤疾患の特定などが日常的に行われている。しかしこのクリニックでは、疾患の鑑別診断と治療というよりも、かかりつけ医として育児する親に寄り添い、子供の健康面での不安を解消することに重きを置いて日々診療しているのだと感じた。そしてこれは、大学病院のような大きな病院が苦手とするという点で、地域医療において非常に重要な要素だと考える。

小児科ならではの印象的な場面もあつた。夏場はヘルパンギーナや溶連菌、アデノウイルスなどの感染症が多いが、咽頭の発赤場所、例えばアデノウイルスでは舌扁桃が腫脹・発赤するなどを瞬時に判断して疾患の鑑別を行っていた。その上で迅速診断キットを用いて検査を行い、適切な処置をしていた。驚くべきところは、小児は基本的に診断のためのいかなる手技も嫌がるため、院長先生はあらゆる手技を一瞬で行っていたところである。患者は口内に舌圧子を挿入すると一瞬で泣き、検査キットのために鼻から綿棒を挿入すると泣く。そのような中、一瞬で判断を行う技術に脱帽であった。また、それらの検査をせずに問診と聴診で重症度判定とある程度の診断を行う症例もあつた。これは、普段の患者の様子を伺うことのできる地域の病院ならではの感覚を感じた。

昼から午後にかけては、院内見学と事務作業見学をさせていただいた。その中で、このクリニックでは個人クリニックならではの患者に対する心配りが数多く行われていることに気づいた。例えば、子供連れの車のために駐車場の1台あたりのスペースを広く取る、窓からは外部が見えないようにして付き添いの親御さんの緊張感を軽減する、患者の位置

情報などをパソコン上で共有して迅速な対応を可能にするなどである。患者に良質な医療を提供するには、患者が病院と接する全ての要素、いわゆるタンジェントポイント一つひとつに気配りをするのが重要なのだという。医師は、このクリニックにおける「診療」というタンジェントポイントのみを担うため、それ以外の事務や受付、電話対応、患者のお見送り、院内の雰囲気など、全てのポイントで患者や家族が満足するようなサービスを提供することが大切なのだと思います。

また事務では、保険証などを受け取る作業以外に、受付の際にある程度患者の症状と発症までの経緯などを問診し、簡単なカルテのようなものを作ってパソコン上で共有する作業を行っていた。午前中の診察見学で、院長先生は最初からある程度患者情報を把握した上でスムーズに診断しているという印象を受けたが、これは事務作業との連携がうまく取れているからこそなのだと理解できた。クリニックでは事務職員と看護師合わせて5人で仕事を行っていたが、それぞれが口頭やパソコン上で情報共有をし、先んじて自主的に院長先生のサポートにまわっていた。作業を全て均一化することなく個人の裁量にある程度任せる勤務形態により、5人のスタッフと医師が連携を取ることでよりスムーズに医療を提供できるのだと考える。

実習を通じ、地域病院の強みは患者との距離が近く、より個人に寄り添った医療を提供できることであると考えた。「地域に根ざした子どものためのクリニック」「クリニックが皆様の子育ての一助に」という理念の通り、あかりこどもクリニックは患者やその家族一人ひとりに親身に寄り添う医療を提供していた。このような細やかなサービスは、地域の医療機関に特有なものなのだろう。逆に、大学病院など大きな病院では、高度な機械と技術が存在する。「個人に寄り添う医療」と「疾患を正確に診断・治療する医療」という2つの医療の分業を行うことで、地域全体での医療の質が向上するのではないだろうか。また、鑑別診断には問診が重要であることも学んだ。実習前の授業で問診のやり方について学んだが、実際の診療でも、症状の発症時期や時間経過、症状の特徴や強さなどを尋ね診断に繋げると実感できた。加えて、重篤な疾患の症状を調べ、それに当てはまるか否かで処置を変えろという現場に即した方法があることも学んだ。問診から鑑別診断に繋げる技術を身に付け、医師として現場で活躍できるようになりたいと思う。

最後になりますが、今回の実習でお世話になった北原院長先生をはじめ、スタッフの皆様に御礼申し上げます。この貴重な経験をもとに、地域医療の一端を担う医師となれるよう精進いたします。この度は本当にありがとうございました。

【参考文献】

- ・クリニック紹介 あかりこどもクリニック
<https://akari-kodomo.com/clinic.html>